

# 接 取 地

日本山妙法寺山主  
藤井日達

南無妙法蓮華經

アメリカの対日援助政策が去廿二日の新聞に発表された。ヤング課長は曰く

「日本の防衛力が向上すれば米軍の漸次撤退が出来る、独立国に外国軍隊が駐屯する場合に常に起る摩擦を除くことが出来る」と云つた。

常に起る摩擦とはいつも外国の駐留兵の不道徳、横暴種々の犯罪以外の意味ではない。

「外国兵の犯罪白書」を国警本部から発表した、それによると、昨年五月から本年四月迄の講和発効後満一ヶ年間の総犯罪発生数は三千三百八十二件、月平均二百八十二件、一日平均九・四件となつておる。

外国兵の犯罪件数中、米軍部隊員に由る犯罪が大部分を占めておる、殺人、強盗、強姦、暴行、傷害、詐欺其他の破廉恥の犯罪を犯さざるものは無い。

「基地の子」や「日本の貞操」等の書物が出版業界を賑はしておる、是等の書物は犯罪件数とは別に、駐留軍兵隊に由て破壊され躊躇されつゝある日本の社会綱紀、道德感情の頽敗記録である。是等の書物の売行がよいと云う事は、日本人がやうやく日米安全保障条約の正態を見先めんとする心を起した証拠である。

○ ○

最近石川県内灘村に米軍試射場永久接取の問題が起つた。内灘問題が政治問題に発展すると云はれるけれども、元来政治問題の失敗が内灘問題となつて現はれたものである。今度内灘問題を何とか解決しても根本の政治問題が解決されない限り、此種の問題は日本各地に無限に起るであらう。内灘にては地元民、県民全体の頑強なる接取反対を受けた政府は、地元村民説得につとめたけれども政府の説得は成功せなかつた。その間にアメリカは遠慮無しに六月十五日から試射を開始せねばならぬから、それ迄に是非に接取交渉を取纏めておけと日本政府に嚴重に要請した。政府は進退是れ谷まつて遂に自ら血路を開かんが為に、地元村民の反対を押切り社会の予論を無視して、強制接取の権力手段を採用する事に決定し、他方地元民の反対結束を切崩しにかかつた。「汝等若しあく迄も政府の交渉に応ぜなければ、政府は安保条約第三条の規定に従ひ已むを得ず必要な土地を強制接取せねばならぬ。もし強制接取さる時には、汝等は一錢の補償金も貰ふことが出来ずして其土地を放逐さることにもならう。それよりはするかとも見えた。

六月十五日に反対民衆が坐り込みをしておる内灘の現地に於て、アメリカ兵の実弾射撃は何の遠慮もなく定刻から開始された。

○ ○

寧ろ有利な条件の下に補償金を沢山貰つて、政府の交渉に応じた方が得策ではないか。」と、地元民、県民の中にも政府の強制接取の決定を聞くや、転んでもたゞは起きないと云ふ利欲に敏き二三の県会議員の自由党員や、村委会議員の者等が秘かに反対結束の歩調を密にかけた。かくて政府の脅迫は或は成功するかとも見えた。

アメリカの日本国土内に於ける永久接取地はひとり内灘ばかりでは無い。富士山麓も、浅間山麓も、妙義山麓も、阿蘇山麓も、其外無制限に接取地を要請しておる。現在迄にアメリカが接取したる地域は伊予、土佐、阿波、讃岐の四国の島の面積にも匹敵する広範囲に延長しておる。

先年日米安全保障条約を締結したる時に、吉田内閣を売国奴内閣と罵つた者があつた。不幸にして日本各地は、内灘を始めかつから売渡されて永久に日本人立入禁止区域となることをおもふ時に、彼の若干の政権を握つた政党員等の企つるやうに、強制接取がそう甘く成功するものか否かは、俄に測り識られないものがある。

抑もアメリカは何が故に地元村民、県民広くは日本人全体の根強い感情的な反対がある事をしり乍

ら、日本政府に遠慮も無く、六月十五日に試射開始を通告したのであらうか。

平和憲法の下に生産に従ふ農業、漁業の祖先伝來の狭い地面や海面に於て、平和なる村民の安全をこそアメリカは保障すべき任務であるのに、平和の保障とは反対に、権力を以て非平和の戦争紛ひの事を為さんが為に、農民、漁民の土地、海面を接取して彼等に生産の途を失はしむるが如きの心理を我々は不審する者である。

○ ○

トインビー教授の「歴史研究」には、西欧人の此心理が解説されてある。

「我々西欧人は土着民を歩行する樹木位にしか考へて居ない、偶々各地に於て棲息する土人達に出会ふ時には、犬か猫かの野獸に出会つたとしか考へない。彼等土人は普通の人間が持つ権利を所有しない者として待遇しても毫も差し支へは無いと感じて居る。土人が所有して居る土地は単に土人が土着して居ると云ふに過ぎない、そしてどんなに永く住んで居つても其土地に対して土人は何等の基本的権利を取得することは許されない。我等は西欧人の先駆者達が未開地を開拓する時に伐採したる森林の大木か、或は彼等が射落したる大きな獲物の一として土人を取扱つて来た。彼等土人の生命は一時的な存在であり、土人所有的土地は一時的な土着に過ぎない。」

次にトインビー教授は自ら問を發して曰く

「開化せる万物の靈長達（是は西欧人に局る）は、人間と云ふ獲物（是は東洋人其他諸民族總てを指す）をどのやうに取扱つて来たか、是等の獲物（東洋人其他の諸民族達）は其等諸民族自身が繁栄して居つた時代にあっては、其等諸民族各自の卓越したる支配権に由て、確実に土着して居る土地を所有して居つたが、それはそのままに所有させておいて宜しいのか。」

是等万物の靈長達（西洋人に局る）は長い時期に亘て此間に回答を与へて來た。そして現在に於ても同様に此間に對して回答を与へつたる。其回答に曰く

「そうだ、我々西洋人は是等土着民を、結局我々西欧人に由て放逐される可き有害動物として放逐するか、さもなくば森林伐採者とか、或は水汲みに使役せんが為に飼順らることが出来る温順なる家畜として取扱はねばならない。」

○ ○

世界各地に各種の民族が昔から住んで居る。日本には大和民族が住んで居る。大和民族が日本国土に國家を經營してから凡そ二千六百年を超ふると傳へられておる。然しあメリカ人の眼から之を視れば、日本国土は日本民族に基本的な取得権は無い。譬へば鳥が昔から梢に棲んで居つたからと云つて、其の梢が鳥に取得権は無い、又狐が昔から穴に住んで居つたからと云つて、其の穴が狐に所有権が無いやうに、日本国土に日本民族が幾歳久しく住んで居つたにしても、アメリカ人は日本人を日本国土から其欲

するが儘に放逐する事が出来る。アメリカの戦争目的は日本人の為には至上命令である。アメリカはいつもでも至上命令を発して強制接取することが出来る。

支那事変の頃、日本の関東軍は、新京に於て数々満系、鮮系農民代表者を集めて、農産物供出促進会議を開いた。其席で彼等農民代表者に、日本の戦争に協力する事を至上命令であると呼んだ。今や日本がアメリカの至上命令を受くる位置に立った、因果応報は現世にあらわれた。

## ○ ○

若し土人達が其所住の土地に執着してアメリカの永久接取を拒むが如き者は、皆是れ其土地に住む有害動物である。彼の鼠か蛇かの如き類であるから、是等の有害動物は所詮放逐せられねばならぬ。其の有害動物の筆頭は共産主義者であり、次には社会主義者、知識階級、諸種の平和論者等である。是等はアメリカに敵意を与ふる者である。

其外アメリカ人の為に有害動物狩りに使役する殺人業者、保安隊、民衆籠絡にあたる自由主義政治屋内閣と議員、炊事夫、掃除夫、街娼、パンパン娘等の如きはアメリカ人の命令に従順にして無害なるが故に、成るべく英語を聞分けて其命令に服従するやうに、飼順らす事が出来る温順な家畜群である。家畜群の筆頭は吉田内閣員であり、自由党であり、改進党であり、国家警察官吏、保安隊、予備隊であり、再軍備論者であり、反共産主義者である。是等には援助費を与へて当分育ててゆかねばならぬ。併

し是等家畜群と雖も其生命の安全は一時的のものである。絶対に保障されるものでは無い。譬へば豚や鶏が毎日飼料を貰ひ小舎をあてがわれてはあっても、一生涯いつ迄も其主人が豚や鶏の生命を安全に保障してくれるものではないとの同じ筋合であると云事を、予め心得ておかねばならぬ。

## ○ ○

西欧文明は又キリスト教文明と呼ばれる。西欧人の宗教は全体キリスト教である。キリスト教の邪見が彼等西欧人の世界観に対する邪見の根本を培つておる。

試にドイツのフォイエルバッハの意見を抄録して見やう。

「我々がキリスト教徒の許に見出す思想と心術とは、イスラエル人の許に於けるものと同じものである。(即ち世界創造の目的は独りイスラエルであった。世界はイスラエル人の為に創造されたものであった。そしてイスラエル人は世界の実であり、他の民族は皆世界の殻である。)キリスト教徒は此思想を承け継で云ふ、(万物は人間の為に存在し、人間はキリストの為に存在し、キリストは神の為に存在する。神は撰ばれたる人々の為に世界を造つた。神の創造の際には教会に役立つ以外の如何なる目的をも持つて居なかつた。)ここから又キリスト教徒が全地球、又全世界の所有者であると云ふ事は神の正義に適ふ所以であり、背神的な人々や無信仰の人々が、彼々の国々を所有して居るのは、神の正義に適はぬ不法な事であると云ふキリスト教徒の信仰が起るのである。」

アメリカ人の世界支配は、彼等がキリスト教徒なるが故に神の正義に適ふものであると想ひ、背神的な人々や無信仰の人々に由て組織されたる共産党諸国、ソビエットロシヤの如き国々は、全く神の正義に叶はぬ不法な存在であると云ふ宗教的邪見がある。

一方共産主義諸国は、マルクスの唯物弁証法に由る社会進化必然の運命として、資本主義諸国の政権を打破して、共産主義者の政権に由る社会を創りあげる迄、武装革命に奮闘せねばならぬと云ふ科学的邪見がある。ヤソ教の宗教的邪見と共に共産主義の科学的邪見とが、ソ米両国家に祟を喰つて、世界人類の脅威となつておる。世界人類の脅威は彼等が最も残忍なる殺人力、破壊力を有する武器を掌握しておる事である。

西欧に発達したる宗教も科学も、其中に内蔵する暴力万能、殺人肯定の迷信に由て、結局は相互殺戮、相互崩壊の危機に陥つてしまつた。いい換えれば、西欧には平和の宗教が無く平和の思想が無かつたと云ふ証明である。

もしソ米戦争を未然に阻止せんと欲するならば、一方はアメリカ人の信ずる世界創造の利己主義な目的と感情とを改めさせ、他の方は共産主義者に憎悪、格闘、復讐の煩惱を煽動する事を止めて、信頼、慈悲、哀感の精神生活面を採用せしめねばならぬ。是は西欧人一般に宗教的改革なくしては、到底達成されない處の根底深い禍である。

さてトインビー教授の言葉に由れば、西欧人等が斯る事を過去幾世紀間に亘てやつて來たのみならず、今日に於ても同様に斯る事を英米人等は先天的に正当な権利として、彼等が行動を計画しておるのである。

近代英國の採用したる海外移住政策法に由て、到る処に於て先住民族を完全に放逐したと云ふのが其事実であり、其結果であつた。日本民族も亦彼等白色人の海外移住政策行動に由て、早晚完全に日本国土から放逐されるか、若くは虐殺されるかせねばならない運命に置かれておるのではなからうかと云ふ不安が、内灘の強制接取事件に由て我々の行末を憂らせて來た。

日本の朝鮮統治の失敗も、朝鮮人の土地を安価に日本人が買収して、朝鮮人を朝鮮国土から放逐した。朝鮮人は恨を呑んで故国を離れ、或者は日本に渡り或者は満州に移つた。満州に於ても開拓団を茨城県の内原に於て訓練し、彼等青年に満州人の土地を買収して耕作せしめた。満州農民は墳墓の地を立てられて森林の中に追込まれた。日本の権力が崩壊するや否や、彼等は再び森林から出て来て日本の開拓移住民の男子を虐殺し、小児を踏殺し、其婦女子は総て下婢として寒中跣足で立働かされ、而も満系の児を産ませられた。

権力政治の法的根拠と云物が、いかに民衆の憤激を買ふものであるかを知らねばならぬ。日本の朝鮮、満州に於て採用したる土地接取の罪業を、今日我々はアメリカに由て償はされんとしておる。

○ ○ ○  
インドのパール博士が、曾てアメリカの指導者と日本の人団問題に就て討議した。其の時アメリカ人は、「そんな事はわけはありませんよ」と事も無げに云ふので、博士は「それでは一体どうすればよいのか」と聞くと、「ナーニそれは日本に食糧を送らない事ですよ、そうすれば四五年たつ間に、日本人は二千万人位は餓死してしまふのですよ」と、アメリカ人は冗談でなくして真剣にそう返答した。博士は最早開いた口が塞がらないで次の話が進められなかつた。欧米人が我々アジア人を見る目の底には、實に惡魔的冷酷さが潜んでおると、博士は語つてゐる。

○ ○ ○  
アメリカのトルーマン前大統領は、独立宣言第百七十五年紀念式典に際して演説した。

「ソ連の指導者達は虚言と脅迫と破壊とに由て世界を支配せんとしておる、朝鮮戦争は其一例に過ぎない。ソ連の自由主義諸国に対する反撃は世界的となり、単に火力と劍とに由る攻撃計りでは無く、破壊、恐怖、暴力、拷問、監禁、虚言及謀略の攻撃である。」

アメリカのソ連非難の声を聞く迄も無く、我々も亦ソ連の虚言と脅迫、拷問、監禁、火力と劍とに由

る侵略を身に沁みて知つて居る。

○ ○ ○  
日本の右傾団体は特に共産党を憎んで居る。

我々はソ連の侵略を恐るると俱に、アメリカの日米安全保障条約の意味する所も次第に明に理解されて來た。

アメリカの指導者達が第二次世界大戦終結に於ける主要なる活動は、アメリカが共産主義諸国と対抗戦闘せんが為には、是非とも世界に跨る広汎な権力圏を拡張し、アメリカの勢内範囲乃至は決定的な支配範囲を拡張せねばならないと云ふ事であつた。是が為にアメリカは権力政治の特徴として、外の諸国民、諸政府、諸領土を飽迄圧迫し冷遇する事であつた。奄美大島、沖縄、小笠原群島の領土圧迫、日本政府に対する軍事基地、演習地の接取圧迫、再軍備の強制、日本民衆の農業、漁業の生産破壊、沖縄群島民の日本復帰運動の冷遇、弾圧等々を接して無限に起りつつある。

全島軍事基地化された沖縄に至つては、全島民の生活が保証されて居ないのみならず、島民の生命すらも何等保証されて居ない。アメリカが分割統治しておる島々には、学校施設は馬小屋同然の物であり、学校に通学する事が出来ない少年が三割近くもあると云ふ事が報道せられておる。

○ ○ ○

アメリカの斯の如き日本に対する無制限の権力圏拡張を認めなければならぬ根拠は、吉田内閣が締結せし日米安全保障条約に基ておる。

其の第三条に曰く

○ ○  
「行政協定の実施に伴ふ土地の使用などに関する特別措置法」として、「必要適当と認めた土地は政府が使用出来る」と規定してある。是では民衆がいくら反対しても抗議しても、アメリカが必要であり、適當であると云ふ間は、政府は権力を以てアメリカに使用される為に接取せねばならない。日本の政府の仕事は、日本国土を使用せんとする、アメリカの執行事務機関に過ぎ無い。是がわかれれば民衆は政府の処置を信頼する事が出来なくなる。

安全保障と云ふ名義は覆面であつて、其実はアメリカ人の日本国土に対する強奪心、権力欲、個人的優越感を合法化し、神聖化し、効果的に遂行せんとしたるものに過ぎない。

終戦後日本の復員軍人を追放し、總て山林原野の開墾に逐い込み、交戦国の軍隊として厚顔にも、乃公則ち日本の平和を保障してやると云ふ事すら、随分如何はしい事であるのに、安全保障を口実として、狹隘なる日本内地に、七百余ヶ所の土地を随意に永久接取し、平和建設にいそしむ農村漁村に入り込み、生産を破壊して、戦争意識をそそる実弾射撃や、其の他種々の軍事演習をせんが為に、広大なる

○ ○  
殺人破壊の訓練をいかに熱心に大規模に行つても、軍備をいかに拡張しても、それに由て国家民族の地域を荒廃せしめつつある。彼等の必要適当と云ふ演習も射撃も、畢竟それは殺人破壊の練習である。殺人破壊の練習に由て恐怖を生ずる者は、共産主義諸国民では無い。実を克して云えど、日本人に対する威嚇射撃であり示威行進である。

殺人破壊の訓練をいかに熱心に大規模に行つても、軍備をいかに拡張しても、それに由て国家民族の安全も和平も保障されないのみならず、逆に国家民族の不安と危険、犠牲と屈辱とを招くと云ふ事を我々は生々しく体験し得た。さればこそ終戦後翻然として、武器に由り、戦争に由る安全保障の迷信を捨てて、別に前人未発の恒久和平建設を万国歴史に對けて遂行せんと発願したるものである。我が日本の平和國家建設は、世界情勢が平和になったから、それに付隨してゆかうと云ふのでは無い。それとは反対に、世界情勢が侵略の危険に晒され、稍もすれば人類絶滅の悲劇をさへ想像さると云ふ環境を見て、此の時代の困難を克服せんが為に、万難を排して恒久和平建設に邁進せんとする者である。されば平和國家の日本は、いかなる侵略者、戦争挑発者に対しても終始武装を以て対抗することなく、彼等の為に一切の諸悪を皆悉く忍ばねばならぬ。我々は誰に対しても憎悪や、敵対感情や、戦争意識を起すべきではない。暴力や、残忍や、憎悪や、敵対感情や、戦争意識の上には人間の共同社会生活は成立しない。人間相互に尊敬し、礼拝し、布施し、供養してゆくことのみが、人類という種族の永遠に亘る繁栄

策であり、其の中にのみ自己の一身も亦安全に保証される道がある。

我々はいかなる環境の下にあっても宗教的、道徳的平和の感情を養ひ、正法、正義に由る最後の勝利を信じて、暴力の恐怖から解脱せねばならぬ。非武装の平和を以て武装の侵略を克服せんとする事が、日本民族が負へる最困難なる使命である。それは正しく困難なる使命である。

○  
アメリカ兵が日本国土に駐留して軍事目的に托して弾丸を発射し、農業、漁業を破壊し、街娼婦村を作つて風紀を蒸し、其外殺人、強盗、強姦、窃盜、暴行、破壊、詐欺、横領等一切の犯罪を犯さざるものはないという国警本部の犯罪白書の外に、暗から暗に葬り去られつつある彼等駐留軍の殺人、強盗、強姦、暴行、破壊の如き一切の犯罪件数は、其幾倍にも幾十倍にも達するであらうことは、民衆が親しく見、且つ聞く所である。

○  
政府は切りに共産党の暴力を恐怖するけれども、彼等は未だ曾て斯の如き多くの犯罪を社会の上に公然と犯しては居ない。政府は何故に駐留軍の社会に及ぼす斯る法律的、道徳的犯罪の被害を恐れないか。政治的組織をもつ政府と称する一小部分の社会の権力を以て、村民の主張も、県民の希望も、国民の与論も総て考慮されること無く、但だ弾丸製造業者、一部社会の利害支を問題として内灘村の強制接取が行はれた。これでは到底円満の解決にはならないであらう。そこに国内叛乱の種子が播かれる。国内直接間接の侵略は許す可ぎであらうか。

○  
叛乱を引起す者は平和なる民衆では無くて、いつも民衆を圧迫する権力政治の濫用である。

○  
ダレスの真空論に云ふが如く、日本国にアメリカの軍隊が駐留せなければ、共産主義諸国が好機到来として日本を侵略し占領する事が絶対に有り得ないとは云はない。もし共産軍が日本侵略を此の次の目標とすれば、たとひ日本に若干の廢品同然の時代おくれの武器を以て裝備されたる日本の保安隊や、臆病なる若干師団のアメリカ駐留軍が居つても、共産軍は断じて戦争行動に出づるであらうことは、朝鮮戦線に於て疑ひも無い事実である。彼等は日本を完全に占領するには僅かに七十時間を要すれば足ると放言しておる。然しながら我々は彼の共産軍の直接間接侵入の宣伝におびやかされて、此のアメリカの直接間接の侵略は許す可ぎであらうか。

○  
抑も侵略の定義と云ふものは国際法上未だ確定しては居ないけれども、凡そ他国の領土を占拠し他の政府を圧迫し、他国の民衆を冷遇し、支配し、搾取することが即ち侵略行為であらう。

○  
我々は日米安全保障条約に由る外国軍隊の日本国土駐留を必要とせざるのみならず、外国軍隊の駐留に由て国家の危険、民族の不安を激発するものとして、全部の外国軍隊即時撤退を要求する者である。

○  
日本が若し飽く迄非武装不戦の憲法を守らんとする時に、強大なる軍備をもち、原子兵器を蓄えたる

強大国が、無制限に各自の利己主義、権力欲を主張して日本を圧迫する時に、日本は全く絶望的な位置に置かるるやうな氣持がするであらう。実際に今日から是等強大国、アメリカに非ざればソ連の為に日本民族は冷酷残忍に取扱はれるかもしね。たとひいかに冷酷残忍に取扱はれても、それは敢えて日本人の名誉とは云ひ得ないにしても決して恥辱では無い。況や此の事は全日本人の罪悪では無い。非武装の国民を虐待、凌辱したる国家民族こそ、永久に不名誉であり真実に罪悪である。

武装を以て武装に対抗し、戦争を通じて平和を守らんとする其のあとに来るものは、累々たる人の屍と愁々たる其怨み丈である。アメリカは朝鮮戦争に由て徒に屍の山を築き、女子供の怨を受けて帰らねばなるまい。

平和建設の為には暴力に依らずして、戦争殺人の罪悪に加はらない事が、終局の勝利であり建設的である。其為に非武装にて戦争を否定せねばならぬ。

○  
内灘の強制接收の如きは日本の悲劇の序の口に過ぎない。無制限なる軍事基地、演習地の永久接收も亦日本の悲劇の一部分である。

真実の日本の悲劇は、将に起らんとする彼等に由る日本国土の分割統治、日本民族同胞間の殺人戦争である。其現証は近くは朝鮮の卅八度線分割に由て引起されたる朝鮮戦争であり、又中国支那の国共内

戦の継続である。遠くはドイツの東西分割である。何れも自由主義と共産主義との戦争である。

○  
アイゼンハワーが就任早々彼の政策六項目を発表した。其の中に

「アジャヤの戦争はアジャヤ人にさせる」と云ふ一項目が有った。

然るにアジャヤ諸国民の間には、古来平和の歴史を持ち今日にも何等相互に戦争せねばならぬ所以は持合せて居ないから、是非ともアジャヤ人に戦争させる為には、戦争目的を立て戦争原理を与へねばならぬ。アメリカは自由主義こそ人類の幸福を保証するものである。人類は自由主義を擁護せねばならぬ。自由主義の本山はアメリカであるからアメリカに協力せねばならぬ。自由主義の敵は共産主義であるから、自由主義諸国は共同の目的として、世界何れの処に在つても共産主義を反撃せねばならぬ。共産主義反撃こそアジャヤ諸国民、就中日本政府の神聖なる戦争目的であると宣伝した。

朝鮮、支那、其外アジャヤの一切の戦争行為は皆此の共同目的の下に戦はれておる。

之に対してアメリカの侵略や日本政府の隸属外交に不審を懷き、若しやアメリカ軍隊が日本国土に駐留せなかつたならば、日本民衆の平和建設はかくまでも無惨に圧迫されないであらうと思ひ、アメリカ兵の撤退を希望する人々は、アメリカ排撃の手段として共産主義を採用せんとして居る。共産主義は戦

闘的唯物論と称して、彼の権力を破壊せんが為に我が暴力行使せんとするものである。我が暴力を行使せんが為には、日本共産党は武器をソ連や中共から輸入せねばならない。

去る廿日の衆議院外務委員会に於て

「公安調査庁としては、日本共産党が既に高度の武器を持っていると云ふ確實な情報がある」と証言した。

○ ○

かくてアジャヤの戦争をアジャヤ人にさせ、朝鮮の戦争を朝鮮人にさせ、中国の戦争を中国人にさせ、日本内地の戦争を日本人にさせる事が出来るならば、其時彼等は恣に朝鮮を分割したるが如く、亦日本を分割して統治するであらう。

既に琉球列島に九十万の日本人が住んで居る。琉球と小笠原群島はアメリカに分割され、千島、樺太はソ連に分割されておるけれども、それ等は未だ日本に対立するには余りに小さい、も少し日本国土を分割せねばならぬ。分割の名目は、日本国土を永久接取する事が出来る條約文がある。

此の如くにして日本は漸次無力化され、分割され、隸属化され、戦場化されるであらう。

ソ連製の武器と米国製の武器とに由て、平和国家を宣言したる日本民族同胞が、相互に大量にして残酷を極めたる戦争殺人をし合ふ悲劇を思ひ至る時に、誰れか声をあげて泣かざる者があらう。

我々日本人はその信ずる主義主張がいかに相反しても、それに由つて左右に分裂しても、決して暴力を採用して相互ひに殺し合ひをしてはならない。

暴力を採用する前に日本民族に課せられたる尊き天の使命。それは民族的にして且つ生命的なる使命があることを覺らねばならない。

○ ○

現在文明の基礎となつておるもののは、アメリカの資本もソ連の生産も何れも俱に物質第一主義である。物質第一主義は、当然生活の精神的側面、人間的な希望も、嘆願も、想像も總て顧られなくなる。

物質第一主義の原理を変革せざる限り次の戦争は到底避け得られないであらう。次の戦争は物質文明の自体崩壊作用として行はるるであらう。我々は物質第一主義から生れた侵略戦争に於て行はるる、殺人掠奪を肯定する所の浅間しき文明を克服して、平和なる精神文明を提倡せねばならぬ。

従来永く西欧諸国に於て習慣付けられたる社会組織の基礎原理たる唯物主義、経済第一主義を変革して、世界人類大同団結と相互扶助との社会生活に、宗教的色彩を施し、但行礼拝と布施供養とを展開せねばならぬ。

○ ○

人間が最も幸福にして愉快な活動は生産活動である。その生産活動が権力的な制限や強制に由て搾取

されてしまふ、それが西欧諸国の社会組織の基礎である。此の現象を納税の義務と名附ておる。又日本にても徵税旋風と称して市民を一家心中に逐ひ込みつゝあるものである。若し我々の生産活動が制限されず又強制されずして、但だ純粹に悦びの感情を伴ふて社会に役立てさせる事を、之を相互扶助と云ふ。与ふる悦びは貰ふ悦びよりも尚一層悦ばしい事を教ふるものが、仏教に説く布教供養の修行である。布施供養は彼の慈善と其性質に於て天地雲泥の相違がある。人間が大同團結せんが為には相手方一般の人類を理解せねばならぬ。いかに理解すべきか、人類一般は通じて無上の尊嚴なる如来世尊或は神となるべき本性をもち、仏となり神となる可き仕事をせんとすればそれが出来る者であると、かく理解する時に、日頃宗教的本尊として仏陀世尊に対して尊敬し来つた合掌礼拝の儀式を、此の人類の社会生活に移し来つて相手の人間を礼拝して平和建設を祈る。いかなる暴力に対しても但だ礼拝を行ふ、暴力は人を屈伏する事は出来ても人を團結させる事は出来ない、礼拝は人を屈伏せしむる事は出来なくとも、人を親密に理解せしめ團結せしむる事が出来る。

## ○ ○

日蓮大聖人の立正安國論に曰く

「汝早く信仰の寸心を改めて速に實乗の一善に帰せよ。然らば即ち三界は皆仏國なり、仏國それ衰へん哉。十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壞れん哉。國に衰微無く土に破壊なんくんば、身は是れ安全にして

心は是れ禪定ならん。此の詞此の言、信ず可し、崇むべし矣。」

## ○ ○

世界の危機が切迫しておる丈に我々は躊躇する事が許されない。若し我々が傍観したり愚図ついて居たりするならば、世界の中に暴力戦争を否定し、精神的平和建設を提倡するに堪ふるいかなる民族も外には見出せないであらう。物質第一主義の変革は、ソ米両国の旧き主義主張の克服である。我々日本民族は共産主義の犠牲となるべきでも無く、亦資本主義の世界支配の犠牲となるべきでも無い。原子兵器の残虐の下に赤手赤脚にして立上り、唯一片の精神的平和の光明を掲げて、以て西欧の機械文明を克服せねばならない。

抑もそんな事が事実可能な課題であらうか。然り、それが可能である。只それのみが可能である。現在人類の恐怖は原子兵器でも無く、無人飛行機でも無く、誘導爆弾でも無く、大軍備でも無い。之等の兵器や軍隊を駆使して、人類絶滅の戦争行為を肯定し採用する處の、人間の宗教的感情、道徳的判断の一般的水準の低下こそ、實に現在人類の恐怖の根源である。若し人類一般に、人間相互に大量虐殺に対する宗教的悲しみの情操、道徳的罪悪感の恐れとが恢復するならば、いかなる人間も原子爆弾を何の怨みもなき人間の上に投下する事は到底出来なくなるであらう。そこに國際間の正義が成り立ち人類の調和が求められるであらう。罪悪を心中深く改悔して居ないアメリカの将来は、ここに呪はれねばならぬ

ぬ。

先日来朝したるルーズベルト夫人も、今日尚原子爆弾投下のその罪悪を飾らんが為に何處の道徳にも見出せない詭弁を弄して居つた。

○

現在は全世界が軍事的精神状態に凍結されてしまつておる。軍事的・精神状態は結局人類の恐怖を齎し<sup>もたらす</sup>た以外に、人類の為には何のたのみにもならなかつた。人類は此の恐怖を遁れんとして切りに別な道を求めて居る、別な道がいかに険しくとも狭くとも、そちらへ行くより外に此の人類の恐怖からは遁れ得られない。別の道とは宗教的感情、道徳的価値の一般的向上である。我々はいかに自ら微力な者であるとしても、微力なるが故に愚図ついては居られない。率先して平和建設の精神的な擁護者となり、唱導者とならねばならぬ。之こそが人類共通の目標であり、現代救済の方法である。六合を凍結したる厳寒の氷も、その氷の中に凍結されたる草木の新しい精気が動き初むる時に、誰れかその柔かな芽が氷を破る事を信ぜられやう。然しその生気が動く時、やがてその氷も解くる、それが一陽來復の立春である。人類の社会にも一陽來復の時が来る。

厳寒は立春の序曲であるが如く、人類の恐怖は平和建設の前兆であると考ふる時、精神生活の生氣は勃然として一般人類の心の中に萌すであらう。我々はその内心的確信に由てのみ、此の危険なる時代の

試練を克服する事が出来る者である。廿世紀後半の人類社会の問題は、人類絶滅か、然らずんば人類大同團結かのその何れかである。それは亦暴力の勝利か、然らずんば精神力の勝利かのその何れかである。

○

我が日本国は既に人類大同團結の為に、精神力の勝利を信じて立上つた者である。原子兵器の脅威の前に我々は合掌礼拝して立たねばならぬ。我々は人を殺す事に由つてでは無く、人に殺さるる事によつて、原子兵器の害悪を此の地上から、拭ひ去らねばならぬ。彼の所謂、神に捧げられる犠牲壇とは此の如きものである。

合掌